

あざらしのひと

浅生鴨

## 目次

勝手の人	101
先に決める人	97
ニユーヨーカー	93
ノッてる人	89
漏れる人	85
無名の人	81
雑談の人	77
のほう者	73
ギオン者	69
たんと者	65
エコーの人	61
忍者の人	57
あざらしのひと	53
好きに使う人	49
未来の人	45
バットマン	41
そつと置く人	37
受け継ぐ人	33
褒める人	29
エキサイター	25
おさない人	21
ミス・ダブル	17
激しくブレる人	13
マネーマン	9
のほほんの人	5

ロンリー・ボーイ

手ぶらの人

エレガントの人

飛ばす人

観察者

121 117 113 109 105

## 勝手の人

緑色のジャージと茶色のジャージ。もちろん体の横には一本の白いライ  
ン。それが彼らの決まつた服装だった。

数年前まで、うちの近所には昔ながらの自転車屋があつて、天気のいい  
日には、ジャージを着た年配の男性が、いつも二人揃つて店の前に置かれ  
たパイプ椅子に腰を下ろして話し込んでいた。

「空氣か？」

「はい。少し抜けちゃつて」

「よし、入れてやるよ」

僕が近づくと二人はそう言つて立ち上がる。

入れてやるよとはいうものの、コイン式の空氣入れなので、お金は僕が  
払う。そこがどうも腑に落ちないまま、勢いに押されて自転車を渡すと、

緑色がタイヤのバルブを緩めて針を差し込み、茶色が僕から受け取った百円玉を機械に入れる。プシュー。連携プレーなのだ。

「はい、終わり」

僕に自転車を返した二人は、そうして再びパイプ椅子に腰を下ろす。

ここではこの二人が空気を入れるのである。僕だけでなく子どもたちもお母さんも、こんなふうにして空気を入れてもらっている。

ところが、である。なんと一人は、この自転車屋で働いているわけじやない。毎日勝手にやつてきて、勝手に座つて、勝手に客の自転車に空気を入れる人たち。勝手の人なのだ。

そういうえば僕が小学生のころには、こういう勝手の人がたくさんいたようだ。子供たちを相手に勝手に野球のコーチを始めるおじさんや、「草花を大切に」なんて看板を勝手につくつて公共の花壇に置いていくおばさんなんかがいて、それはもうお節介この上ないし、ちょっとびり迷惑な

のだけれども、それでもなんとなく周りからは受け入れられていたよう気がする。

勝手の人は何も気負わない。ちょうどジャージを着ているときのように自然体で、あちらこちらの布がゆるく余っていて、どこかカッコが悪い。それが僕たちを呆れさせ、そして、ホッとさせる。

やがて自転車屋は店をたたんで、二人の姿も見かけなくなつた。錆びたシャッターが降りた店の前を通りかかると、あの二人は今でもどこかで勝手に空気を入れているのだろうかと、ふと考へる。

そして、ときどきは僕も心にジャージを着られているのだろうかと自問するのだ。

ピラミッドに雄と雌があることは古くから知られているが、見た目も大きさも殆ど変わらないため、これまでなかなか区別がつかなかった。だが、今回発表された研究結果によると、動きかたの一部に大きな差異があることが判明した。

動けばすぐに区別がつくらしい。問題は、なかなか動かないことである。

## 先に決める人

長期間にわたる海外でのわりと大規模な仕事が終わって、なんとか無事に帰国したあと、それまでチームを率いていた偉い人が「なあ、打ち上げでは何を食べたい?」と、なぜか僕に聞いたのだつた。

そのチームでは、僕一人だけがやけに若かつたから、せつからくなら若者の意見を聞いてやろうという采配だつたのかも知れない。

その僕はといえば、子どものころから、魚の煮付けやら、ゼンマイの佃煮やら、なまこの酢の物やら、椎茸の煮物やら、タコわさびやら、若竹煮やらという、田舎の居酒屋でお母さんが適当につくりましたよといった感じのものが好みで、つまり、いわゆる若者らしい食べ物をあまり好まない。もしも本当に僕の食べたいものを言えば、おじさんが多めのチームとはいえ、やっぱりみんな困るにちがいない。

そこで僕もいちおうは気を遣つて「和食です」と答えたのだった。

和食という大きめのカテゴリーにしておけば、なんとでもなるはずだ。

天ぷらだつておでんだつて和食なのだから。

ところが僕の答えを聞いた偉い人はとても困った顔になつて「うーん、和食で焼き肉かあ」と言つたのだった。

「え？ 焼き肉ですか？」

「だつて焼き肉だろ？」

これが先に決める人である。

世の中には、何かを始める前にすでに結果を決めているというタイプの人<sup>が</sup>いて、若者だから肉だろ、肉だから焼き肉だろと彼の中では最初からもう決まつているのだ。

そこに和食だなんていう予想外の言葉を投げ込んでしまつたものだから、偉い人も険しい顔つきになつたのである。

先に決める人は僕たちに選択の余地を与えてくれないし、思った通りの結果にならないと不機嫌になることが多いから、なんとなく迷惑に感じることもある。でも、こうなるのだと先に決めて、周りを巻き込みながらまつすぐ、ゴールへ向かう人がいなければ、たぶん僕はいつまで経つても迷い悩み、足を踏み出さないまま立ち止まることになる。

だから、先に決める人が近くにいてくれるのは、あんがい悪くないんじやないかと僕は思つてゐるし、あれくらい何でもズバッと決められたら気持ちがいいだろうなあという憧れさえある。

打ち上げは結局、鉄板焼きになつた。和食で焼き肉。意地でも焼き肉。さすがだなと僕は思つた。

## ニューヨーカー

横断歩道の向こう側におじいさんとおばあさんが並んで立っていた。  
おばあさんは横を向いて一生懸命に何かを話しかけていて、それなのに  
おじいさんは前を向いたまま適当に相槌を打っているだけだった。

突然、おばあさんが手を伸ばしておじいさんの手を握った。おじいさんは驚いたようにピクッとしたあと、おばあさんのほうに顔を向け、そして何かを呟いた。引っ込めようとするおじいさんの手を握ったまま、おばあさんは軽く首を左右に振つてから微笑む。握った手は離さなかつた。  
ちょっとぴり強引に手を握つたおばあさんがとても可愛らしくて、ああ、  
この人はニューヨーカーだと僕は思つた。

いや、よくは知らないんだけど、ニューヨーカーって人の目なんて気に  
もせず、自分のやりたいことを堂々とやる人たちつて印象があるじゃない

ですか。ないですか。

僕たちはつい周りの目を過剰に意識してしまうけれども、実際には誰も僕のことなんて見ていないし、たいして気にもかけていない。

前髪の先がどつちを向いているかをいちいち気にして、ガラス張りのビルに映った自分の姿眺めているのは自分だけだ。

だから僕たちはもつとニューヨーカーになつたほうがいい。ものごとの基準は周りの人たちではなく、自分自身の中にあるのだ。

信号はなかなか変わらなかつた。

黄色い箱に目をやると「ボタンを押してください」の表示が出ている。  
なんと向こう側の二人はボタンを押していなかつたのだ。手をつないだまま時間が流れるのに任せている。

慌ててボタンを押そうとして僕は手を止めた。もしかすると、これは少しでも長く手を握っていたいというニューヨーカーの狙いかも知れない。

そう考えると、うかつにボタンを押すわけにはいかないじやないか。

しかたなくそのまま立っていると、ふいにおばあさんが真面目な顔に戻つて、つないでいないうの手でぐいっとボタンを押した。どうやら甘い時間は十分に堪能したらしい。

ああ、そーか。

もし僕がボタンを押して信号が変わつても、おばあさんは自分が満足するまでは、その場を動かなかつたにちがいない。

だつて彼女はニューヨーカーなのだから。

語源には雄と雌がある。雌の語源は、雄の語源が巣をつくり、せっせと言葉を集めてくるのを待つてから、最後に雄」と食べてしまう。最近の研究によると、雌が雄をたべることで語源が混ざり合い、新しい語源が生まれることがわかつてきた。なお、雌には鋭い牙と爪があるので、不用意に近づいてはいけない。

## ノッてる人

夜道を歩いていたら突然、背後から「あ〜」という叫び声が聞こえてきて、思わず背筋がピクツとなつた。しかも、声はどんどん大きくなるから焦る。僕は飛び跳ねるように道の端へ体を寄せた。マンションの壆に背中をピタリと当てて、忍者と化した僕のすぐ横を通り過ぎたのは一台の自転車で、若い女性が乗っていた。そして「あ〜」という絶叫はそのまま「〜いしてる〜」と続いたのだつた。

歌だった。自転車に乗った女性が大声で歌つていたのだ。とても気持ちよさそうで、もうノリノリなのだ。どうやら、あいしてるらしい。

これが、ノッてる人である。

ノッてる人は、深夜の自転車に限らない。電車の中でヘッドホンを耳に当てた高校生が、曲がサビに差し掛かったのか、急に膝を手で叩きながら、

うつかり声を出したあと、恥ずかしそうに周囲を見回す。

何か嬉しいことがあると事務作業をしながら「♪フアイルをコピーしましようか♪」なんてオリジナルの歌をつい歌つて周囲から笑われる。

誰にでもこうした経験はあるはずだ。ふとしたはずみで、誰だつてノつてる人になるのだ。

ノッてる人は自分の世界に夢中で、周囲のことがまるで見えていないから、ときと場合によつては反感を買うかも知れない。何せノッてるのだ。無駄にノリノリなのだ。気分の落ち込んでいる人や具合の悪い人にしてみれば、そんなふうに浮かれている人が近くにいると、ちよつぴり腹立たしく感じるかも知れない。

でも、こんなふうについて歌つてしまふのはいいことだと僕は思う。

ともすればじつと気持ちを抑えてその場をやり過ごそうとする僕たちの口から歌は流れない。何かの拍子に歌つてしまふのは、そこに感情が動い

て いる証拠だし、それに、何よりもノッてる人は楽しそうだ。

そりやもちろん、背後から自転車に乗つたまま歌つている人が迫つてくるとかなりびっくりするし、深夜に酔っぱらいが大声で歌つているのは、正直に言えぼうるさい。

でも、自由に歌を歌えない世の中は、きつとずいぶん息苦しいものになるだろう。だから周囲を気にせず、どんどんノッてる人になればいいと僕は思うのだ。どう？　みんなはノッてるかい？

## 漏れる人

旅先の土産物店でレジに並んでいたときのことだ。僕の前には年配の女性客がいて「ああ、そつちの二十個入りがよかつたかしら、でも前田さんと吉村さんのところだし、やつぱり十個入りでいいわよね」などとブツブツ言っている。もちろんこれは独り言で、誰かに話しているわけではない。そのうち「ねえ、これって甘いのかしらね」と、あまりにもはつきりと声に出したもののだから、店員が「それほど甘くはありませんよ」と答えたら、女性は驚いたような顔をしている。

ああ、お母さん。お母さんは自分がずっと声を出していることに気づいていないらしい。

これが漏れる人である。

漏れる人は、娘が連れてきた恋人を前にして「ちょっとこの人、太り過

ぎよね」と平氣で口にするし、眞面目な会議の途中に「ああ、疲れたなあ」なんてことをいきなり大声で言い出す。ふつうは思つても口にしないし、たとえ口にしても多少は気を遣つた言いかたをするのに、漏れる人は気にならない。頭に浮かんだことがぜんぶ言葉になつて口から漏れ出しているのに、そのことに気づかない。

レジで会計を終え、クレジットカードを取り出したお母さんは、店員から端末を渡された。

「こちらに暗証番号を入れてください」

「はいはい暗証番号ね。暗証番号は言わないのよ」

端末を受け取りながらもお母さんはずつとしやべり続けている。そうして「暗証番号は、い、わ、な、い、のよ」と声に出しつつ、その声に合わせて指先でボタンを順に押していくのだ。

いやいや待て、待つてお母さん、それ、たぶん言つてるから。思い切り

言つてるから。その言いかただと、どう考へても一〇七一か一八七一だから。とてもいい語呂合わせだとは思うけれど、それを声に出してしまつたら意味がないからお母さん。

それでもお母さんは気にしない。この調子だと、きつと周りにはいろいろ迷惑している人もいるんだろうなあとは思う。

けれども、漏れる人から漏れ出す言葉は本音だ。そこには嘘がない。

いつも嘘や秘密でがんじがらめになつて建前しか口にできない僕たちよりも、たぶんずっと自由なのだ。

僕はデータラメが書けるようになりたいのに、いつも最後は常識がジャマをする。もちろんジャマをするのは常識の雄です。常識の雌は警戒心が強いので、最初から人間には近寄らないことで知られています。なお、ジャマにも雄と雌があり、常識の雄によるジャマの雄はかなり面倒で鬱陶しいです。

## 無名の人

今はコロナの影響で、中止や延期になつてているものが多いけれども、世の中には、僕たちの予想を遥かに超えるほどたくさんの種類の見本市やカンファレンスが存在している。

僕は人の多い場所が苦手だから、その手の催し物にはあまり積極的には参加しないものの、それでも招かれたり誘われたりして、どうしても断り切れずに足を運ぶことが、たまにはある。

受付で名前と所属の記されたバッジを受け取り、首からぶら下げて会場をウロついていると、ふいに声をかけられ、ああ、どこかで見たことのある顔だ、いつたい誰だっけ？ と一瞬考え込むことになるのだけれども、ここで、首からぶら下げたそのバッジが役に立つ。なにせバッジにぜんぶ書いてあるのだ。

もともと人の顔や名前を覚える気のない僕にとつて「この人は誰だっけ？」と考えずすむこの仕組みは、とても便利だ。ありがたい。

ところがである。ときどき、バッジをぶら下げていない人が現れるから困ることになる。

それが「無名の人」である。

「無名の人」の多くは、イベントの主催者やスポンサー、役所なんかの偉い人たちで、なぜか誰もが自分のことを知っていて当然という態度で登場するからなかなか厄介なのである。もちろん、その世界ではきっと有名な人なのだろうけれども、人の顔も名前もさっぱり覚える気のない僕にとつては、バッジをぶら下げていらない時点で、単なる「無名の人」でしかない。

そういえば、イギリスの俳優ベネディクト・カンバーバッчが、とある映画祭に現れたときには、ちゃんとバッジをぶら下げていたどころか「カンバーバッチです」と挨拶までしたそうで、いや、知ってるわ！　さすが

にあんたにはバッジ要らんやろ！　とツッコミたくもあるが、それにしてもベネ、いい子だな。バッジも下げず名前も教えてくれない「無名の人」には、ぜひ見習つて欲しいと思う。

もちろん「無名の人」は、有名だから「無名の人」でいられるわけで、バッジを外せばすぐに本当の無名の人に戻る僕たちとは違つて、彼らはバッジを外しても、無名には戻れない。

みんなが自分のことを知つていてる状況は、きっと楽なことだけでなく、気苦労だつてたくさんあるのだろう。せめて自分を知らない人にはもうこれ以上は知られない今までいたいとバッジを外していいのかも知れない。

有名になりたいと願う人は多いけれど、好きなときにバッジを下げたり外したりできるくらいが、ちょうどいいんじゃないかなと僕は思うよ。

## 雑談の人

僕のよう個人で広告をつくつてはいるが、広告会社や代理店、ときにはクライアントの会議に呼ばれて、あれこれ気の利いたことを言うのも仕事のうちだから、本当は打ち合わせや会議なんて面倒くさいし苦手なのに、しかたなく参加することになる。

そうした会議にときどき紛れ込んでいるのが雑談の人である。

雑談の人は、意見を求められたわけでもないのに、急に思い出したかのように議題とはまるで関係ない話を始めて、会議をややこしくする。

さらに問題なのは、雑談の人の話はけつこう面白いことで、無関係の話題で場がどんどん盛り上がり、ただ時間だけが過ぎていくことになる。 急ぎの案件があつて、その会議ですぐに結論を出したいと思っているメンバーにしてみれば、雑談の人はひたすら迷惑でしかない。 司会者も困つ

た顔をしつつ、でも、雑談の人はたいていちよつぴり立場が上だつたりするものだから、止めることもできず、ノートにメモを取るふりなんかをして、やりすごすことになる。

ところで、みんながこれを読むときにはどうなつてているのかわからないけれども、今はまだ新型コロナウイルス感染症拡大防止のために、できるだけ家にいようとされていて、会議もオンラインが中心になつていて。

今、僕の参加しているオンライン会議の多くは、決められた時間にきつちりと始まつて、あらかじめ設定された議題を話し終えたら、予定の時間にはちゃんと終わる。余計な時間は一切ない。

そこに雑談の人が入り込める隙間はないから、たぶん生産性は上がつているし、きちんと会議を進めたい人にとっては快適なのだろうと思う。

でも、やっぱり雑談の人がいてくれないと僕はどこか物足りなく感じてしまうのだ。

もちろん雑談、だらけで会議そのものが中途半端になるのはよくないのだけれども、会議の後で「ほら、始まる前に話していたアレなんだけどさ」だとか「途中で話が変わっちゃつたけど、あの件はね」なんてことから意外な企画が生まれることだつてあるのだから。

役に立たないことこそが役に立つ。あまり長々と雑談だけを話されるのは面倒くさいので願い下げだけどね。

「これは、好奇心いっぱいのスマーフ  
サーモンの子供たち。次々に焼き立ての  
バゲットへ乗ろうとしていますが、この  
ままでは人間に食べられてしまいます。  
スマーフサーモンの親がバゲットから  
子供たちを降ろし始めました。このよう  
にスマーフサーモンは雄雌がつがいで子  
供を守る」とで知られています。

## のほう者

ランチを食べながらミーティングをしようということになつた。  
テーブルにつくとすぐに店員がやつて来る。

「お飲み物のほうはどうされますか？」

僕はここでおやつと思う。どうやら奴がいるぞと思う。

やがて頼んだものがテーブルに届いた。

「こちら唐揚げのほうになります」

「シソとタラコのスペゲティのほうになります」

やつぱり奴がいた。

何にでも「のほう」をつける「のほう者」である。

ああ、勘違いをそのまま覚えてしまつたアルバイト敬語なんだろうなあ  
なんて思ついたら大間違い。会計になると「あ、今日のところは私のほ

うで払つておきます」だ。

ほらね、こっち側にだつて「のほう者」は潜んでいるのですよ。気を抜けば奴はすぐに現れるのですよ。

言葉は使われているうちに変わるから、そういう意味では正しい言葉なんでものはないし、むしろ僕は言葉をどうおかしく使うかを日々考えている者だから、うるさいことを言う気はないけれど「のほう者」はわりと気になる。それは、彼らが面と向かつたコミュニケーションを避けているようを感じるからなのだ。

「のほう」は、ものごとを遠まわしにして、ぽかすときには使う言葉だから、必要もないのに「のほう者」が登場すると、いつたいお前は何の責任から逃げようとしているのかと、その弱気さを不思議に思つてしまつ。

ところがである。「のほう者」はみんな弱気かと思うとそうでもない。デザートを頼もうとしたら「プリンのほうがいい」、食後には「あつち

の店のほうがよかつた」なんて言うタイプ、これが「が」のつく「のほう者」、強気の「のほう者」である。

強気の「のほう者」は断言する。いちおう何かを比較しているようでいて、実はただ自分の主張を押しつけてくるだけだから、わりと面倒くさい。でも、ものごとをすぐに決めてくれるから、便利ではあるのだ。

人との距離感をつかむのが苦手という意味では、弱気のほうも強気のほうも似ているけれど、強気のほうが僕の性分のほうに合つた「のほう者」のほうだと思っている。

## ギオン者

とある企業から頼まれた案件があつて、打ち合わせのために先方へ伺つた。ピカピカのガラス張りビルは、ロビーが三階まで吹き抜けになつていて、おお、さすがは飛ぶ鳥を落とす勢いのＩＴ企業だなと感心する。

会議が終わつたあと、「社員食堂で昼食はいかがでしょう」と誘われたので、僕はぜひぜひとと答えた。

エレベーターで目的の階に着いて、びっくりした。なんというか、ぜんぜん社員食堂じやないのだ。僕の想像していた社員食堂とはまるでちがうのだ。いちおう食堂なんて古風な名前はついているものの、その実態はビルのワンフロアをぜんぶ使つたオシャレカフェというか、レストランというか、とにかくそういう場所で、メニューにだつて、A定食だのソフト麺のミートソース和えなんものはなくて、何とか焼きの何とか添えだとか、

生野菜のナントカーノなんてものが並んでいる。隅っこにはドリンクバーまであるし、もちろん高層階のピカピカガラス窓を通して東京の街並みが遠くまで眼下に広がっている。どうやら夜にはバーになるらしい。

世界よこれがＩＴ企業だ、なのである。ああ、僕もこういう食堂を見たことがあるよテレビで、ええ。

席に着くと「ここにちは」と一人の女性が僕たちのテーブルへやつてきた。社員の人は顔なじみらしく「あ、どうも」なんて答えている。

彼女は消毒液の入った霧吹きと布巾を手にしていた。毎回こうしてテーブルをきれいにするのだろう。やっぱりさすがのＩＴ企業である。

「シユツ、シユツ」彼女はそう言つて霧を吹いたあと「はい、キュキュツ」とね」と声に出しながらテーブルの水滴を拭き取つた。

「おまたせ」それから僕たちに向かつてたっぷりと頷いて、テーブル拭く間、脇に避けてあつた調味料を元の位置に戻した。

「はい、ポン、ポンつと」調味料を置くのに合わせてそう言う。

まちがいなく「ギオン者」だった。はい、京都の祇園は関係ありません。自分の行動になぜかいちいち擬音をつけるのが「ギオン者」である。

彼らは電化製品のボタンを押すときに「ピッ」、如雨露じようろで花に水をやるときに「ジャー」、棚からタオルを取り出すときに「サツ」などと、知らず識らずのうちに擬音を声に出すのだ。

慣れないうちは、いきなり擬音を声に出されると驚くし、つい笑いそうになるかも知れない。けれども「ギオン者」は、自分の行動に集中しているだけなのだ。自分自身が次にどう動くのか、このあと何をするかが明確にわかっている。いつも周りの人に流されて、うつかり適当に行動したあと自分の動きに気づいてがっかりしている僕とは大違いなのである。

そう、どうせ口に出すのなら、後悔の溜息なんかよりも楽しそうな擬音にしたいよね。

大阪のオバチャンには一種類ある。  
ヒョウ柄とヘビ柄とスパンコール。

## たんと 者しゃ

ドラマなどでもときどきそういうシーンがあるけれど、広告の撮影現場にクライアントがやって来るとなると、そりやもう大騒ぎになるわけです。

広告会社の営業担当者は「宣伝部長のお弁当は魚がいいだろうか、肉だろうか、先週、中華街の話をしていたから中華にするか。いや待てお寿司かも」と無駄に気を揉んでいる。

サラダのドレッシングも念のために何種類か用意していたら

「ちょっとそれ、瓶に入ってるじゃないか。ダメだよ、瓶はダメ！」

「なんで瓶がダメなんですか？」

「部長の奥様がいま韓流ドラマにハマっていて、ヒョンビンに夢中なのがお気に召していないんだ。ビンつてつくものはぜつたいにダメだから」

なんてことを本気で言い出しかねないから、もはやコントの世界である。

クライアントから「あれはないのか?」と言われたときに「もちろんあります」と答えられるために何をもを事前に用意しておく。その気の遣いかたは尋常じやない。

日本では売っていない種類の炭酸飲料を飲みたいと言われたら、そのまま空港から香港へ飛んで密輸して来てもおかしくないのだ。

現場を担当する下請けの僕にしてみれば、そつちではなく、ものづくりの中身にもつとお金を使つて欲しいと思うんだけど、やつぱりクライアントが優先される。そりやまあそうだ。

日々、そんなクライアントの細かく無茶な要望にあれこれ応えるため、事前の準備を徹底している担当者は、それがすっかり習慣になつているから、いつしょに居酒屋へ行こうものならおおごとなる。

四人しかいないのに、

「唐揚げを五人前、焼き鳥を五人前、シシャモは、うーん六人前、それと

餃子は人数ぶん……いや、やつぱり五人前で

と、やたらめつたら過剰発注なのだ。しかもどう考えてもおかしな量を頼むものだから、残すのが苦手な僕としては冷や冷やすることになる。でも「あれはないのか?」が許されない彼らにとつて、それは当然のことなのだ。それこそが彼らにとっての最大のサービスなのだ。その場にいる人がとにかく満足するようにと考え、自然にそう振る舞うのだろう。

彼らは担当者ではなく「たんと者」なのである。昔話に出てくるおばあさんが「たんとおあがり」というあれなのである。

僕としては、食べ物が余つたり残つたりするのはあまり好きじやないのだけれども、残りものは若くてお金のないスタッフたちが持ち帰ることになるから、まあ、それも悪くはないかなあと思うことにしている。

## 王コ一の人

世の中には、相手の言つたことをそつくりそのまま口に出す人たちがいる。「あの山の上にはお寺があるんですよ」と言えば「あの山の上にはお寺があるんですね」と答えるし、「この団子、原材料は鶏肉なんですよ」と言えば「この団子、原材料は鶏肉なんですか」と、ただ同じことを繰り返すのだ。彼らは、おいちよつと待て、それって今僕が言つたことじやないかと即ツッコミたくなるほど見事なオウム返しをするのである。

僕は心理学の専門家ではないから本当かどうかは知らないけれども、人間は相手が自分と同じポーズをとつたり、同じ言葉を繰り返したりすると、その相手のことを身近な存在だと感じるらしくて、だからビジネスの現場では、わざとそうするようく研修で教えているところもあるらしい。この心理状態がいわゆるオームの法則である。嘘です。ごめん。

さて、このオウム返しをする人たちの中には、さらに特殊なタイプが紛れ込んでいる。この特殊なタイプの人はすべてを単純に繰り返したりはない。「あの山の上にはお寺があるんですよ」と言えば「お寺が」と答え「この団子、原材料は鶏肉なんだよ」と言えば「鶏肉」と答える。相手の言葉の一部だけを復唱するのだ。同意しているのか、感心しているのか、はたまた疑問に思っているのかもわからない謎の復唱をするのだ。

この手の人には会うたびに、僕は小学校の卒業式を思い出す。

「楽しかったキャンプファイヤー！」

「キャンプファイヤー！」

「みんなでがんばった運動会」

「運動会！」

なぜか全員で声を揃えて言う、あれです。

会話をしているときに相槌がまるでないのは寂しいけれども、自分の

言つたことをそつくりそのままオウム返しされると、ちょっとびり馬鹿にされているような気もするし、なんだか鬱陶しい。

でも、単語の一部だけを繰り返されるのは、ちゃんと聞いていますよという合図のようで、なんとなく会話のリズムが整うような気もする。

そういう意味では一部だけを繰り返す人々は、音楽でいうところのエコーなのかも知れない。歌の終わりに、あるいはサビのロング・トーンに、タイミングよくかかつて僕たちを心地よくさせてくれるあのエコー。

きっと彼らはエコーの人なのだ。

僕は上手く相槌を打つのが苦手なので、ときどきエコーの人になるのは、案外いい方法かも知れないな。

イブプロフェンには雌と雄がある。雌のイブプロフェンはイブ、オスのイブプロフェンはアダムと呼ばれている。

なお、まざるなキケン！ かどうかは、

今後の研究課題とされている。

## 忍者の人

テレビ会議なんて、SF映画やスペイドramaの中に登場する最新技術つて感じだったのに、ここ数ヶ月の間にあつという間に広まって、今ではずいぶん多くの人が利用している。

なのに移動する必要がないから時間も体力も使わずに済むわけで、これまでそこにどれほど時間と労力を使っていたかに気づくと、もう元には戻れないんじゃないかとさえ思う。

ところで先日、オンライン会議の途中でちょっとしたハプニングがあつた。参加者の一人が発言をしながら大きく手を振ったところ、どうやら机の上に置かれたマグカップに手が当たつてコーヒーが零れたらしく、彼は「うげえっ！」と奇声をあげて画面いっぱいのアップになつたあと、そのまま画面が真っ黒になつてしまつたのだ。

一瞬にして会議の場から消え去った、その消えっそりたるや、まるで手品師のようだつた。

オンライン会議にはこうした手品師がときどき現れる。いや「現れる」のではなく、文字通り「消える」と言うのが正しいのかも知れない。

コーヒーをこぼす以外に、何かの書類を表示しようとして、あるいはマイクのオンオフを切り替えようとして、ときにはこつそり別の作業をしようとして、彼らは次々に消えていく。

だが、手品師ではまだ甘い。彼らを遙かに超える消えかたを見せる者がいるのだ。それが忍者の人である。

忍者はしつかり画面に写っているのにもかかわらず、存在感がまるでないのがすごい。

デジタルとは残酷なもので、これまでのリアルな会議であれば、ほんのわずかに体を動かしたり、腕を組んだり、咳払いをしたりして、なんとな

く存在感を發揮できていたのに、オンラインではそうした気配がまるで伝わらないから、特に発言もせず、ただそこにいるだけで参加している雰囲気を醸し出していた忍者の人たちは、今や、そこにいるのにいないという忍法雲隠れの術を身につけてしまつたのである。

忍者的人はまるで気配がないから、会議に出ていなくてもバレないし、途中で消えても誰も気にしない。

できれば僕もその忍法を身につけて、つまらない会議からはドロンと消え去つてしまいたいんだよなあ。

## あざわらじのひと

以前、僕の仕事場は都心にあって、周辺にはコンビニエンスストアがいくつも店を構えているから、ちょっとした買い物に困ることはなかつた。いや、ちょっととした買い物に困らないどころか、仕事に行き詰まるといいコンビニへ行つて必要もないのにあれこれ買つてしまふから、むしろお財布は困つていたのかも知れず、良いのか悪いのかはどうもよくわからない。それはともかく、僕は近所のコンビニへよく行つていたのだ。

別にこの都心の店に限つた話ではないけれども、コンビニで使われる言葉は独特だ。若い店員たちが口の中でモゴモゴと発音する専門用語は、初めは何と言つているのかがわからず戸惑うものの、すぐに慣れるし、聞き取れるようになる。シャツセン、ラシャセ、アツシター、ハツシイウスカは、それぞれスミマセン、イラッシャイマセ、アリガトウゴザイマシタ、箸い

りますか？ だ。

その日、店に入った僕はいきなり「あざらし」と言われた。言つたのは若い女性の店員で、たぶん他の国から日本へやつてきて、コンビニでアルバイトをしているのだろうと思われる。ともすれば無表情になりがちな店員が多い中、彼女はニコニコと笑つて「あざらし」と言う。

店に客が入つてくると「あざらし」、レジに商品を置くと「あざらし」、買い物を終えて出て行く客にも「あざらし」。いつたい何の省略形なのかまったくわからないが、とにかく「あざらし」は、彼女にとつては何にでも使える言葉らしいのだ。

いいじやないか、と僕は思つた。決まり切つたマニュアルの言葉だけを口にするのではなく、自分でもお客様に挨拶をしたいと、きっと先輩たちの話し方を見よう見まねで真似したのだろう。そして、うつかり何かが混ざつたまま「あざらし」という言葉を覚えたのだろう。

ただ働いてお金をもらうのではなく、もう少しだけコミュニケーションを深めたい。その思いが、彼女を「あざらしのひと」にしているのだ。

そんな彼女たちに「ちゃんとした日本語を話せ」と威張るおじさんたちがいる。早口で難に伝えたタバコの銘柄を聞き取れなかつただけで「国へ帰れ」なんていう人たちがいる。

冗談じやない。言葉も文化も違う国で、あんなに複雑なコンビニの仕事をこなしているのだ。笑顔とともに声に出される「あざらし」は、ちゃんとした日本語だ。少なくともむやみに威張り散らすおじさんたちのダミ声よりも、わざと聞き取れないように伝えられるタバコの銘柄なんかよりも、あざらしの人の言葉は、よっぽど僕に届いているのだから。

(追記) さつき久しぶりにそのコンビニへ行つたら、挨拶が「あざらし」から「たいらーす」に変わっていた。もちろん意味はわからない。